

目 次

第1章 発達を捉える視点	4
《第1節 子どもの発達を理解することの意義》	4
《第2節 子どもの発達と環境》	4
《第3節 発達理論と子ども観》	6
第2章 生涯発達	12
《第1節 初期経験の重要性》	12
《第2節 胎児期及び新生児期の発達》	17
《第3節 乳幼児期の発達》	20
《第4節 学童期及び青年期の発達》	29
《第5節 成人期及び老年期の発達》	32
第3章 子どもの精神保健とその課題	35
《第1節 子どもの生活・生育環境とその影響》	35
《第2節 子どもの心の健康に関わる問題》	36
第4章 子どもの実態に応じた発達や学びの把握	41
《第1節 保育所保育指針 — 子どもの発達》	41
《第2節 子どもの生活や遊びと学び》	43
《第3節 子どもを理解する方法》	45

第5章 子どもの理解に基づく発達援助	47
《第1節 発達の課題に応じた関わりと援助》	47
《第2節 特別な配慮を要する子どもの理解と援助》	48

※ 各四角の枠内の同じ記号(A、B、C・・・)の()には、同じ語句が入ります。

* 弊社の許可なく、個人的なご利用以外の目的でこのPDF教材を印刷・複製することを禁止します。
また、ご自身でこのPDF教材を紙媒体に印刷し、弊社の許可なく頒布し、またはフリマアプリ・ネットオークション等に出品することは、弊社の知的財産権を著しく侵害する行為であり、これを固く禁止します。

第1章 発達を捉える視点

《第1節 子どもの発達を理解することの意義》

1	「保育の心理学」を学ぶ目的は、保育との関連で子どもの（ A ）の過程や（ B ）の過程を理解し、子どもの心身の状態や行動等を把握する技術を高め、子ども理解に基づき適切な（ A ）援助を行うことにある。	□□□
2	一般的に、身体が形態的に大きくなることを（ A ）といい、精神面および運動面での機能的成熟のことを（ B ）という。	□□□
3	<p>【発達の原理】</p> <p>発達の（ A ）性：発達は飛躍的に起こるのではなく、（ A ）的、漸進的に起こる。</p> <p>発達の順序性：発達は一定の順序で起こる。</p> <p>発達の（ B ）性：発達は一定の（ B ）性をもつ（頭部から尾部、中心部から周辺部、未分化な全体的運動から分化した個々の運動へ）。</p> <p>発達の（ C ）：発達には一定の（ C ）がある。</p> <p>発達の（ D ）性：発達には（ D ）性がある（第1反抗期と第2反抗期の現象など）。</p> <p>発達の（ E ）：発達には（ E ）がある。</p>	□□□

《第2節 子どもの発達と環境》

1	ブロンフェン布伦ナー（Bronfenbrenner, U.）は、発達しつつある子どもは「入れ子構造」になった（ A ）システムの中にはめ込まれていると述べ、日常的な環境でみられる5つのシステムの中で子どもを理解する必要性を提唱した。（ A ）システムは、子どもを中心に考えたとき、子どものごく身近な環境である（ B ）システムを中心とした「入れ子構造」をもち、相互作用的に働くとしている。	□□□
---	--	-----

2	【Bronfenbrennerの（A）システム】		□□□
	（B）システム	身近な行動場面における活動、役割、対人関係のパターン（自分と親・きょうだい・保育所との関係など）。	
	（C）システム	個人が属している2つ以上の行動場面の相互関係（家庭と保育所との関係、家庭と学校との関係など）。	
	（D）システム	個人が直接的、能動的に参加してはいないが、その個人が属する（B）システムに影響を及ぼす可能性がある行動場面（両親の職場、兄弟の学校、両親の友人関係など）。	
	（E）システム	文化全体のレベルで存在しているシステムであり、各システムの内容や形態に一貫性を与え、その基底をなすもの（歴史的な出来事、価値観、文化、言語、イデオロギー、法律、習慣など）。	
	（F）システム	時間軸、世代間の問題に関わるシステム。	
3	<p>かつては、地域で子どもたちの世話をやくおじさん（おばさん）（（A））が存在していたが、コミュニティの変化によって地域の大人の子どもへの関心は薄れ、子育ての習慣なども伝承されにくくなった。このような環境と人間関係の変化は、現代の子どもたちの発達に大きく関わっている。</p>		□□□
4	<p>（A）とは、保育所や幼稚園に通い始めたり、小学校に入学したりなどの人生のイベントや、転居による移動、さらには災害や事故など予想外の出来事によって生じる、その人を取り巻く変化をさす。（A）は、不安や混乱をもたらす危機的状況ともなるが、一方で、今までとは別の見方ができるようになったり、新たな行動様式を獲得することができるようになるなど、プラスの側面も有する。</p> <p>きょうだいの誕生は、多くの子どもが経験する（A）である。子どもによっては、親の関心を奪われる不安から、指しゃぶりをしたり、ミルクを欲しがったりするなど、（B）とよばれる行動がみられることがある。</p>		□□□

4	<p>「(A)」とは、子育てに没頭して、自分の役割に注意を払ってこなかった女性たちが、子どもが進学や就職で生まれ育った家を出て行った後に、生きがいを見出すことができず、うつ的傾向を示すことをいう。</p>	<p>□ □ □</p>
5	<p>最近では、結婚せず、親に頼って生活する人（(A)）、子どもをつくらず、パートナーと2人だけの生活を送る人（(B)）などもみられ、成人期の過ごし方は多様化している。</p>	<p>□ □ □</p>
6	<p>成人期の職業生活においてみられる、仕事中毒（(A)）、燃えつき症候群（(B)）などといった過剰適応的行動は、老年期への移行に当たって問題となる。</p>	<p>□ □ □</p>
7	<p>内閣府の「令和元年版 男女共同参画白書」によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方（(A)意識）に反対する者の割合（「反対」＋「どちらかといえば反対」）は、男女とも長期的に（ B ）傾向にあり、かつ、平成28年の調査では、男女ともに反対の割合が賛成の割合（「賛成」＋「どちらかといえば賛成」）を（ C ）回っている。</p>	<p>□ □ □</p>
8	<p>（ A ）は、老年期の心理社会的危機を「(自我の)統合」対「(B)」としている。老年期には、成人期までの自分の生き方を整理し、統合することが必要となる。</p>	<p>□ □ □</p>
9	<p>カウフマン（Kaufman, S.）は、高齢者が新たに生み出し、維持するアイデンティティを（ A ）とよんでいる。</p>	<p>□ □ □</p>
10	<p>近年、「抗加齢」「抗老化」という意味の（ A ）という言葉がよく使われるようになったが、加齢現象に逆らうことは不可能なので、加齢を受け入れながら心理的・社会的に満足できる幸福な老いが望ましいとする（ B ）という考え方も注目されている。</p>	<p>□ □ □</p>